

いずみさの昔と今 第238回

「大坂の陣と泉州・紀北・檜井合戦への道」②

大坂冬の陣の後の和平はつかの間でした。慶長20（1615）年4月、徳川家康は再び大坂城・豊臣家を攻めるために駿府城を出立し、諸大名にも大坂への出陣を命じました。ここに徳川と豊臣の最終決戦・大坂夏の陣が始まりました。

一方、豊臣家の状況は、豊臣秀頼の家臣である木村重成が義兄に送った書状によれば、大坂城内の空気は悪化し秀頼の母淀君が失政を招いていました。重成は、自分は家康とは親密な間柄であるが、もはや戦死を覚悟していると書いています。秀頼の乳兄弟である重成にも家康の工作が及んでおり、豊臣家は一致団結できない有様でした。

家康は紀伊和歌山40万石の大名である浅野長晟に、大坂への出兵を命じます。浅野家は豊臣秀吉の妻の「おね」（高台院、秀頼の継母）の親族ですが、長晟は家康の息女を妻とし、長晟の姪は家康の子息の妻でした。家康から長晟への出兵の命令のねらいは、豊臣家の親族の大大名である浅野家さえ徳川軍に加わり、豊臣家が完全に孤立していることを天下に示すための

ものでした。

家康は淡路や四国の大名にも、和泉南部に上陸して大坂方面に進軍するよう命じます。浅野軍には淡路や四国の大名軍を先導する任務も与えられました。これは浅野家と淡路・四国の大名の軍勢数万が和泉（豊臣領国）を占領する作戦でもありました。

大坂城の総堀を埋められ籠城できない豊臣軍は、徳川軍が近く前に大坂に近い徳川方の拠点や大名への先制攻撃を画策します。4月28日、豊臣軍の大野治房の軍は、徳川方についた堺の町を焼打ちし堺沖の徳川水軍と戦い、岸和田城（城主は徳川方の小出吉英）を包囲しました。

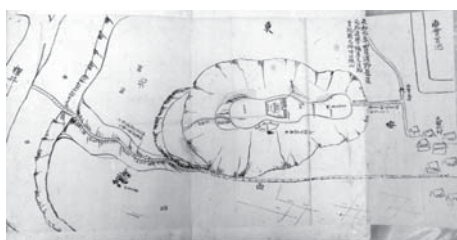
また豊臣家家老の大野治長は和泉南部に重臣2人を送り込みました。浅野軍を脅かすため和泉国で一揆を画策したようです。ただ治長の重臣とその味方の30人は4月28日に信達（泉南市）に布陣した浅野軍に捕らわれました。

浅野家の領国紀伊では大坂の陣を機に、浅野家に反発する地元勢力が、和歌山周辺・日高郡・熊野北山で一揆を起こして

浅野軍と戦いました。和歌山周辺の一揆の指導者の山口喜内は豊臣家と連携して、和泉に進軍した浅野軍を挟み撃ちにしようとした。ただ大野治房軍数千と山口喜内の一揆勢はうまく連携できませんでした。

4月28日、治房の配下の塙右衛門・岡部大学が数百の兵を率いて佐野方面に進みます。浅野軍5千は佐野川まで進みますが、檜井・信達に退き豊臣軍を迎撃する態勢を固めます。こうした徳川と豊臣の和泉と紀伊をめぐる戦略や駆け引きのなか、和泉南部での徳川と豊臣の激突は避けられなくなりました。翌4月29日の徳川（浅野）・豊臣両軍の檜井合戦は目前に迫っていました。

ここで紹介した書状や絵図は、下記の特別展で展示しますので、ご覧ください。



▲檜井合戦の浅野長晟本陣の絵図
（大阪歴史博物館蔵）

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの

特別展「大坂の陣と泉州・紀北 ～檜井合戦への道～」

慶長20（1615）年4月。ついに徳川方対豊臣方の最終決戦となった大坂夏の陣が始まりました。その緒戦となったのが、檜井合戦です。この戦いの帰趨は、大坂夏の陣全体に大きな影響を与えることになります。

平成27（2015）年度は、この大坂夏の陣から400周年にあたります。今回の特別展では、檜井合戦を、泉州・紀北地域における様々な動きのなかで、捉えなおします。

期間 10月17日(土)～11月29日(日)

主な展示資料 泉州檜井合戦絵図（模写・館蔵）、浪速戦鬪之図（大阪城天守閣蔵）、摂州大坂冬御陣之図（大阪城天守閣蔵）、泉州檜井八丁縄手絵図（大阪城天守閣蔵）、浅野長晟本陣図（大阪歴史博物館蔵）、浅野長晟書状（個人蔵）、小堀政一書状（個人蔵）、木村重成書状（個人蔵）

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの

☎469-7140 Fax469-7141

休館日 月曜日（祝日の場合は翌日）、祝日の翌日（土日曜日除く）

開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

入館料 無料



▲泉州檜井合戦絵図（模写・館蔵）